

---

# 英雄雑談

カイラ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

英雄雑談

### 【Nコード】

N4285Z

### 【作者名】

カイラ

### 【あらすじ】

『英雄後談』のリクエスト作品です。

『孫世代を読みたい』との事でしたのでこの小説は孫世代でいつもみたいなオチが無い小説になっている……はず。

短編にしていますが短編なんて言えない短さです。

## (前書き)

お久しぶり、又は初めまして。  
カイラです。

あらすじにも書きましたが『英雄後談』の孫世代で“短編とは言えない短さ”です。

そこは初めにご理解下さい。

「ですから、私の子供には小分けされた食べ物を出してくれませんか？あの子、私に吠えメールを送ってくるほど辛いんですよ」

(……………終わらないなー)

クドクドクドクド長い話しを前に座っているだろう親は飽きずに続ける。

(よくこんなに話せるよなー)

糞爺のダブルドアよりも長いんじゃないか？

(しかも、料理を小分けにさせたいだけで…………)

俺は腕時計に手を触れ、読み取る。

(約一時間は話してるよな…………)

大体、話しの内容も気が弱くて他の人の前にある料理を取れないから小分けにしるって可笑しいだろう。

それを解決するのは本人であって親ではない。

(それを分かっているのかな…………?)

いや、分かっているからわざわざホグワーツまで来たんだろうけど。

「それに、学校の授業も少し、ねえ。早過ぎませんか？まだ子供が出来ていないのにすぐに次の内容って貴方方教授は予定通りに授業を進めたいのじゃないけど、私の子供みたいに置いてけぼりはいけないんじゃないやありません？あくまで学校は」

(授業が早い、ね…………)

置いてけぼりと言うけど皆が出来るまで根気よく教えてたら一つの呪文に四時間以上は要りますよ。

(そう言えたらな…………)

俺の前の親はどうやらホグワーツ運営の…………理事会だっけ？それのお偉い様で逆らうと教員の給料無しで学校費用も無くなるかもしれない、とマクゴナガル校長に言われた。

つまり、荒波を立てるな、と。

「それにですね、そろそろホグワーツも改築してはどうですか？確かにこの学び舎は有名な創設者が建てましたがあれから千年以上特に十数年前には例のあの人の襲撃もありましたし、今年から少しずつ部屋を増やし防衛の【ドカン！】な、何ですか？」  
長々しい話しの間に響く爆発音。

(……スラズラーか)

二年生でグリフィン・ドール寮所属、メイウ・スラズラー。

彼はジエームズ・ポッターを崇拜している一人で、彼を見習い悪戯をしようと毎日奮闘しているが、何故か爆発を起こしてくれる生徒だ。

「……すみません、少し席を離します。ですが俺の代わりにリーマスを超越しますので話しはリーマスに続けて下さい」

しかし、今回だけはスラズラーに感謝だな。スラズラーのお陰で長々しい話しから逃げられた。

「失礼します」

ペコリと相手が居るだろう場所に頭を下げ部屋を出ていく。

「……あ、そうだ」

リーマスへ連絡しておかないと。

俺は杖を取り出し一振り振る。

杖から現れた俺の魔力はスウーと俺から離れて行く。

「後はリーマスが引き継ぐから……次はスラズラーの場所か」

スウーと息を吸い魔力が沢山あるホグワーツの中からスラズラーの魔力を探る。

(……場所は二階、と)

……あれ？

(近場に……ルーシュタット先生？)

確かに彼は授業空いていたけど……

(普段騒ぎがあっても近づかないルーシュタット先生が……ね)

……先生の為に早めに向かった方が良いかな。

俺は二階へ向けて走った。

俺が二階に下り、現場に着いた時はすでにルーシュタット先生が説教をしてくれていた。

「……………す、すみません」

「謝って済む問題ではないだろう。毎回毎回……人が居ないから大惨事にならないだけで爆発自体に危険が無いわけじゃない」

「……………はい」

「グリフィンドールに十点減点。罰則として「隙あり!」……………は？」

その声と爆発音を最後にルーシュタット先生は壁へ追突する。

「よっしやー! ついに悪戯成功!」

…………… 会話だけなら大人しく聞いていたスラズラーだけど彼の崇拜者はジエームズ・ポッター。

説教がルーシュタット先生と中々無い機会を彼が見逃したりしないだろうな、とは思っていたけどこんな事をするなんてな。

「よっしやー、じゃない!」

俺はガツンとスラズラーの頭を叩く。

「こんな事をして良いと思ってるのか? グリフィンドール五十点減点」

痛てえええとスラズラーが叫ぶ間に俺は杖を振り、ルーシュタット先生を医務室へと運ぶ。

「そしてスラズラーにはルーシュタット先生の説教が理解出来てないみたいだから…………… 罰則として今週末、マクゴナガル校長の一日説教」

俺がそう告げるとスラズラーは嫌そうに言う。

「…………… えー…………… それはないですよ、グリフィンドール先生」

「……………グリフィンドール十点減　「喜んで受けるからこれ以上の減点はああああ」……………罰則は今週末マクゴナガル校長からな」

俺はため息をつきながら減点はあああと喚くスラズラーにそう告げた。

（……………マクゴナガル校長の長い説教より減点か）  
減点が嫌なら悪戯をしなければいい。

（……………いや、確かスラズラーはマクゴナガル校長の長い説教を受けてなかったな）

……………来週授業でスラズラーが寝てたら容赦なく起こすよう先生方に言わないと。

「……………スラズラー、この罰則を二度と受けたくないならお前は悪戯を諦めた方がいい」

「……………はい？」  
「忠告はしたからね」

「……………グリフィンドール先生？」  
キョトンとしたような声で言うスラズラーに俺は背を向け歩き始める。

（来週は寝不足だね、スラズラー）  
マクゴナガル校長は数時間で済む説教はしない。

（……………数時間で済む、と言うより俺達が数時間で済まない奴らを乗り越してるからなんだけど）

お陰でマクゴナガル校長の説教は必然的に長くなっていった。

（……………でも、マクゴナガル校長行きへするくらいの事はしたしね）  
悪戯……………と言うより教師に向かって爆発させたからね。

（その爆発されたルーシユタット先生への見舞い品は……………百味ビーンズでいいか）

丁度、貰い物があるし。

（品は呼び寄せ使えば……………今から行けるか）  
俺はカツカツと足を速める。

…今頃、治療して貰っている後輩の元へ。

(後書き)

読んで下さってありがとうございます！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4285z/>

---

英雄雑談

2011年12月14日21時49分発行